

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより
第18号
2018(平成30)年6月26日
(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

生き方を見つめ直す — 機織り1年 その2 —

前回につづき、機織りに取り組みはじめてちょうど1年を迎えたこの時期に、糸と向き合う中で感じたことについて記してみたいと思います。

ポイントは4点。①「焦って、良いことは一つも無い」。②「間違いに、気づいた時点で原点に戻る」。③「誤魔化しは、問題の解決にはなり得ない。逆に傷口を大きくするだけ」。④「まず何よりもビジョンが大切」。前号では①と②について詳しく記しました。今回は③と④についてです。

まず、③について。糸は、もともと細くて絡みやすい性質を持っています。「細い」ということは「切れやすい」、「見えにくい」ということでもあります。また「絡みやすい」ということは、「すぐに纏(もつ)れる」ということでもあります。整経中に畔(あぜ)を取るときや、箆(おさ)通し、綜統(そうこう、もじり)通し、機掛けをしている時に糸が切れたり、箆羽を読み間違えたり、糸が纏れて行方がわからなくなると、焦ります。「焦っても良い事は一つも無い」とはわかっている、気持ちは焦ります。時間がないときはなおさらです。そうすると、どうしても「この程度で良いことにしよう」という誘惑に負けそうになります。問題を完全に解決しきるのではなく、解決しきれていない部分から目を反らし、「解決した！」と自分で自分を納得させ、「これでなんとかなる」と思い込もうとします。しかし、糸は正直です。整経中に畔を1本でも取り間違っていると、そのツケは必ずやってきます。綜統通しを間違っていると、織り付けをした段階で必ず修正を迫られます。箆の羽に正しく糸が入っていないと、織り上がった布に傷が出ます。けっきょく「誤魔化し」は、問題の先送りにすぎません。初期対応を間違えると、問題を必要以上に大きくしてしまい、「こんなことになるのだったら、あのときに多少時間はかかってもきちんと対応しておけばよかった」となるのがオチです。どれだけ慎重に作業を進めているつもりでも、事故(トラブル)は必ず起きます。事故を起こさないのが一番であることは言うまでもありませんが、それ以上に大切なのは、トラブルに出会った時の冷静な(手間を惜しまない)対応であることを、機織り教室の先生方から教えていただいたような気がします。

つぎに④です。機織りは、一つの建物を建てる「建築」と同じだと感じるようになりました。まず、何のために建てるのか、その目的を確認し、どのようなデザインで建てるかを構想します。何階建てか。鉄筋か、木造か。建築資材は外国産か、国産材にこだわるのか。その上で設計図を描きます。細部に至るまで、きちんと計算された設計図が必要になります。電気の配線、コンセントの位置まで記す必要があります。

完成形がきちんとイメージできているからこそ、その作品に見合った糸の総量を算出し、相応しい糸を紡ぐことができます。図案が出来上がっていてこそ、緋糸を括ることができます。工程が明確になってはじめて、今は何をなすべきかが見えてきます。

糸を扱い、機に向かうということは、自分自身の生き方を見つめ直すことにつながります。できれば、①、②、③、④を踏まえた生き方をしたい。切にそう願わずにはおれません。



豊田市民芸館内、挙母木綿教室

Monthly Data

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 平成30年5月24日～平成30年6月23日)
兵庫県1、長崎県1

【H.A.M.A.木綿庵】(平成30年5月24日～平成30年6月23日)

メールを含む各種相談件数7、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数1件2名



《草木染め：藍の生葉染め — 平成30年6月9日》

6月9日(土)、16日(土)、17日(日)に、藍(タデアイ)の生葉を用いて草木染めを行いました。藍の生葉染めは、開花直前の葉が最良との由。今春、徳島県にある阿波藍資料館「三木文庫」の学芸員の方より譲っていただいた種から栽培をはじめ、順調に生長。豊富な生葉を得ることができました。まず茎と葉を選び分け、葉のみをミキサーに入れ、水を加えて攪拌。濾過した染液にハンカチを浸し、約10分間揉み洗いします。その後、水で濯ぐとみるみるうちに鮮やかな色に染め上がります。草木染めの醍醐味です。「藍染めに媒染は必要なし」とも聞きますが、今回は藁灰(アルカリ)と椿灰(アルミ)の上澄み液を用いて媒染し、その違いを比較してみることにしました。また、染料店で購入した助剤(藍溶解液+ハイドロ)も用いて染めてみました。助剤を用いたハンカチは濃い紺色に、灰汁を用いたハンカチは淡い水色に染まりました。椿灰の方がやや緑がかっているようにも見えますが、パッと見には、藁灰との差はほとんどありません。次回は、フクギの黄色に藍の生葉染めを掛け合わせ、緑色を出すことにチャレンジする予定です。

《綿の栽培記録 2018》 — 平成30年度版 その2 —

- 5月27日(日) 間引き。施肥。株元より5cmほど離して穴を開け有機化成肥料を施す。棒肥。
6月6日(水) 農薬散布。アブラムシ発生兆しあり、例年用いているアディオオン乳剤(ペルメトリン乳剤。住友化学株式会社)と、エルサン乳剤(PAP乳剤。日産化学工業株式会社)混合の1,500倍希釈液を散布。
6月12日(火) 支柱立て。和綿のみ。ヒモで8の字誘引。同時に土寄せを行い苗を安定させる。
6月25日(月) 和綿の背丈52cm。洋綿の背丈34cm。いずれも標準木。

【ワークショップ】 — 綿に親しむ：綿繰り、糸紡ぎをしてみましよう — を担当

平成30年5月12日(土) 午後1時30分～3時 天理大学附属天理参考館にて開催
定員20名に対して、付き添いの保護者の方を含めて21名の参加をいただきました。
綿繰り、綿打ち(唐弓、竹弓)、糸紡ぎ(糸車、手作りスピンドル)を体験していただきました。

【綿の加工の作業記録】 (梅田1人の作業量)

- 糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：平成28年, 2016産。丹羽正行氏による打ち綿)
5月24日～6月23日(作業実日数24日) 糸の総量118.7g (31.65匁) 総時間267分(4時間27分)
※1分間≒0.445g 1時間≒26.7g (7.1匁)

【研修等の記録】

- 平成30年6月03日 「相楽木綿伝承館：機織り教室上級コース⑥」(京都府相楽郡精華町) 受講
- 平成30年6月10日 「相楽木綿伝承館：機織り教室上級コース⑦」(京都府相楽郡精華町) 受講
- 平成30年6月10日 京都府向日市を訪ね、当地在住の方より機道具(緋糸括り台等)を譲って頂く
- 平成30年6月14日 「第92回国展」(大阪市立美術館) 工芸部門の染織作品を見学
- 平成30年6月15日 「相楽木綿伝承館：機織り教室上級コース⑧」(京都府相楽郡精華町) 受講
- 平成30年6月17日 「相楽木綿伝承館：機織り教室上級コース⑨」(京都府相楽郡精華町) 受講
- 平成30年6月21日 たんぼぼの家「Good Job! Center KASHIBA」(奈良県香芝市)訪問、打ち合せ
- 平成30年6月24日 豊田市民芸館(愛知県豊田市)を訪ね、武山千江子氏より手紡ぎについて学ぶ

【以下の写真は、左：藍(タデアイ)の株、中：天理参考館ワークショップの様子、右：和綿の様子です】

